

# JIM-NET 便り

2026 2月号

発行：2026年2月28日

特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4丁目4番11号 内藤ビル2C  
電話 03-6228-0746 メール info-jim@jim-net.net



JIM-NET  
الشبكة الطبية اليابانية العراقية



## 目次

イラク再訪 - アルビル訪問記 鎌仲ひとみ (JIM-NET 副代表理事) .....	P2-3
院内学級～サマーコースとウインターコース (アルビル) 大川 梨恵 (海外事業担当) .....	P4
ウインターコース・プロジェクトについて バルザン・エザディン/リーム・アッバス (アルビルスタッフ) .....	P5
野田先生の4コマ漫画 野田 美波子 (日本国際学園大学 講師) .....	P6
サブリーンの手紙 崔 麻里 (JIM-NET 代表理事) .....	P7
企画展「Pray for Peace! ～イラク、シリア、そして世界のこどもたちとともに」 .....	P8

# イラク再訪—アルビル訪問記

鎌仲ひとみ (JIM-NET 副代表理事)

## 混乱期から抜け出して

最後にイラクに行ったのは2002年、イラク戦争勃発の半年前でした。その後、戦争が終結してもイラク国内は混乱の極みに陥り、バグダードの医師たちもどんどん国外へ避難するような状況でした。日本人が人質になった事件もあったし、通訳をしてくれていたイラク人の家族が誘拐されたり、誰と誰が戦っているのかもわからないテロが横行する状況が続いていました。戦後のイラクは長く、イラク人自身にとっても生き抜くこと自体が厳しい場所となっていたと思います。

あれから、23年経ってイラクは戦後最も平和で安定した状態になったと2025年は言われていました。私が23年ぶりにイラクに行ったのは9月10日のことでした。

## 6000年の歴史ある街

砂漠というとサラサラした砂をイメージするかもしれませんが、イラクの砂漠は正確には土漠だと思います。土と小さな小石や礫の集積した荒野という感じです。2020年に始まったコ

ロナパンデミックで世界はすっかり様変わりして、JIM-NETの役員クラスがイラクを訪問することができない時間が長く続いていました。今回の訪問はその空白を埋め、現地で働いてくれているスタッフを労ってほしいという前代表・池住先生の意見で実現したものです。

私自身は、バグダードやバスラなど撮影で訪れたことがありましたが、アルビルがあるイラク北部のクルディスタンは初めての地域でした。街の中心にアルビル城があり、小高い丘が6000年前に人工的に築かれ、その上に砦のような土レンガの城が建設されたのが5000年前だということです。紀元前3000年ぐらいから人が存在



病院的待合室にある子どもたちのプレイルーム



宿泊施設を案内するバルザン

(左から) 大川、鎌仲、ナナカリ病院事務局長・クロマンディ、ラウンド



シャーム姉妹と



シャームにジブリ絵本を手渡す

実務タイプ。入院した子どもたちの家族が滞在する施設の管理をしてくれていますが、その施設があまりにもピカピカに磨かれているのにびっくり。ヒワは精神科のドクター。若いのにとても有能で、彼のパソコンを見せてもらったら多様なジャンルの資料が素晴らしいレイヤーで管理されていることに感銘を受けました。そして医学的に難しい内容を非常にわかりやすく説明できる能力の持ち主。子ども時代に家族と共に何万人ものクルド人が、サダム・フセインの迫害を逃れて何百キロも歩いて避難した経験を古い写真と一緒に話してくれました。そして唯一の女性スタッフであるリームはシリアからの難民です。院内学級に参加する子どもたちの心理支援に意識が高いことが会話から伝わってきました。彼女が気にしていたのはバグダードの院内学級の現状でした。免疫が落ちる治療をしているがんや白血病の子どもたちへの配慮がもっとされなければならない、と私に詳しく説明をしてくれましたが、その視点がとても細やかで配慮に富んでいました。

そして何より、私が安心したのは、この4人のチームワークが調和的であることでした。

お互いの仕事への理解があり、情報共有もしっかりなされていることが伝わってきました。やっぱり、百聞は一見にしかずとはこのことか、と生身のローカルスタッフに面談し、本音の話をしたことで、これまで抽象的だった感じもあったアルビル事務所の仕事が血

の通った生き活きたものとして私の中に立ち上がるような心持ちでした。

## シャーム一家訪問

チョコやコーヒーの絵を描いてくれたシリア難民のシャームのことは覚えていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。今回、ジブリの絵本を代表の崔から預かって、届けに行きました。お母さんは頭痛がひどいということで寝込んでいて、お父さんと2人の妹、そして弟が出迎えてくれました。シャームはもうすっかり大人びた感じに成長していたのですが、治療の副作用であまり食欲がなく、お父さんが「痩せてしまったんだよ」としきりに気にしていました。シリア難民というステイタスなので治療費への補助が受けられず、特殊な検査をするためにかなりの金額が必要だという現状を話してくれました。(この検査費用はJIM-NETを通じて出会ってくれたサヘル・ローズさんが支援してくれることになりました。)

私がうっかり、シャームにシリアの生まれ故郷のことを聞いてしまい、そこでの悲惨な経験をお父さんが話してくれました。シリア内戦が勃発した街からシャーム一家は避難してきたのですが、街は跡形もないぐらいに破壊されてしまったということです。また、これは私も初めて聞いたのですが、「樽爆弾」という兵器が大量に投下された



東京事務所からの手紙を読むシャーム

というのです。調べてみると「樽爆弾」は非人道的兵器で、中に詰め込まれた金属片が周辺に飛び散って人間を殺傷するというもので、子どもたちもかなり被害を受けていたというのです。シャームはその「樽爆弾」が飛んでくるなんとも言えない音を覚えていて、その音が怖かった、と。ああ、そんな記憶を思い出させてしまった、と反省しました。でも、アルビルはなんとか平和を維持しているのです、シャームの家族が例え色々酷い経験をしながらも普通の暮らしを営んでいることがありがたいことだ、と思ったのです。これからも一家を見守って、支援を続けていけたらと心から願ったのでした。



EMAR SAH 2019

## サマーコースとウィンターコース(アルビル)

大川梨恵 (海外事業担当)



昨年の4月からイラクでの駐在を始めて、一瞬でもう2月になりました。昨年の10月、11月は臨床心理士試験を受けるため日本に帰国していましたが、これで春、夏、冬とイラクの秋以外を経験したことになります(実はイラクにも四季があるのです!)

JIM-NETでは、通院している子どもたちに待合室での活動を中心にサマーコースとウィンターコースを開講しています。参加する子どもたちもその時々で大幅にメンバーを変えながら、勉強とコミュニケーションを学ぶ場になっています。小児がんの子どもたちを支援するときに注目されるのは医療的な支援(医薬品の提供や病院への交通費の支給など)ですが、臨床心理学を専門とする者としてはやはり心理社会的な支援も非常に重要であると日々感じます。「治療を終え通学を再開しても勉強についていけず、最終的に退学してしまう」という問題は支援の課題です。

ここで課題となる点は大きく分けて

2つ、①勉強についていけない、という文字通りの課題、②同世代の子どもと関わる経験が少なく、周囲に溶け込めない、というコミュニケーション上の課題です。①と②、どちらも課題解決に繋がるのがこの院内学級だと思っています。①では、「実年齢より低い学年で勉強をする」という対応策もありますが、そうすると自信をなくしてしまったり、「同世代の子どもとの関係構築力」を伸ばす場がますます限られてしまったりします。また、②については、実際にサマーコースで20人ほどの子どもたちに関わった際、教員や我々スタッフにしか自発的に関われない子どもに何人も出会って深刻な課題だと感じました。

同世代の子どもにもおもちゃを貸してと言えない、『次は私の番ね』ではなく奪うようにピアノを弾いてしまう。描いた絵を見せるのはスタッフにだけ。一人ではなく複数の子どもがそういった行動をするのを見て、なるほど院内学級はコミュニケーションを学ぶ場で

もあるんだと私自身の気づきにつながりました。自分に懐いてくれるから可愛い子だね、ではなく、同世代の子ども同士での会話を促したり、ものを貸してと伝える方法を教えたりする中で、少しずつ子どもにも変化が生まれ、サマーコースの終盤に行った遊園地では子ども同士で楽しんでしゃぐ彼らの姿を見ることができました。ウィンターコースでも子どもの成長がみられるよう、スタッフ全員で彼らを見守りながら一緒に過ごしたいと思います。



アートの授業



12月17日はクルド旗の日。みんなでお祝いをしました。

# ウィンターコース・プロジェクトについて

バルザン・エザディン / リーム・アッバス (アルビルスタッフ)



ウィンターコース・プロジェクトは、病気や継続的な医療治療のために学校へ通学できない子どもたちを対象として実施しています。これらの子どもたちは、身体的な困難だけでなく、学校や友人、日常生活から離れることによる情緒的・心理的な課題にも直面しています。そのような子どもたちを教育面および情緒面の両方から支援し、安全で温かい環境の中で学び続けられるようサポートすることを目的としています。

授業、活動、グループでの交流を通じて、子どもたちが「つながり」「受け入れられている」「大切にされている」と感じられるよう支援し、ネガティブな意味で他の子どもたちと違う存在だと感じることをないよう配慮して行なっています。

バルザンの監督のもと、教師2名およびタクシードライバー2名からなる専任チームの協力で運営しています。子どもたちが安全かつ快適に通えるよう、週3回の頻度で送迎を含めた体制が整えられています。ヴァンダ先生は、理科と数学を担当し、子どもたちの体調に配慮しながら、分かりやすく対話的な授業を行っています。チュラ先生はクルド語と英語を担当し、言語能力の維持・向上を支援するとともに、コミュニケーションへの自信を育んでいます。また、彼女のアイデアを生かしたアートの授業も行っており、子どもたちは自然の花や葉っぱ、またペットボトルのふたやトイレットペーパーの芯を使ったハンドクラフト作品の作成にも挑戦しています。

このプロジェクトには6～10名の子どもたちが参加しており、その中には市外に居住し、通院時に参加する外来患者の子ども3名も含まれています。学習科目に加え、前述の通りアー

トや手工芸の授業も取り入れており、これらの活動を通じて、子どもたちは感情を表現し、ストレスを軽減しながら、前向きで支援的な学習環境を楽しんでいます。毎日、温かく思いやりのある雰囲気の中で、子どもたちと一緒に遊び、交流の時間を設けています。駐在員の大川も日々参加しており、彼女が来ると子どもたちの表情は明るくなり、とても慕われています。ハンドクラフト作成の活動中も、子どもたちを優しく支え、励ましています。

ウィンターコース期間中、子どもたちはさまざまな楽しく意義のある活動に参加しました。『クルド旗の日』に向けた準備として飾りつけや文化を祝う活動を行い、また新年に向けてツリーの飾りつけを行うなど、教室には喜びと期待感が広がりました。特に印象的だったのは、患者のロニアが大好きなユーチューバーのジェール・ザミンさんのサプライズ訪問が実現したことです。ロニアの顔が喜びと興奮で輝いた瞬間は忘れられないものとなり、小さな行動が大きな喜びや希望を生むことを改めて実感しました。また、子どもたちはファンレイジング・フェスティバルの準備にも参加し、企画や運営を通じて、チームワーク、責任感、リーダーシップを学びながら、意義ある活動に貢献しました。

## 参加した子どもたちの変化をご紹介します。

### ・アフマド (8歳)

お母さんの話では、ウィンターコース参加前は部屋に閉じこもり、他者との関わりを避けていましたが、現在ではクラスで最も活発な児童の一人となり、積極的に発言し、新しい友だちもできるなど、著しい社会性の成長が見られています。

### ・ロニア (15歳)

参加前は、姉妹で仲が良い一方、これまで友だちがいませんでした。現在ではクラスメートと友好関係を築き、教師とも自信をもってコミュニケーションを取るようになり、社会的交流が大きく向上しました。

### ・ミラ (6歳)

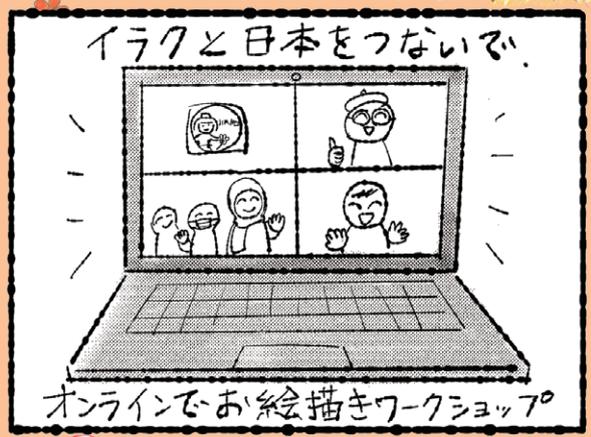
お母さんによると、初回の化学療法後は無口で反応が乏しく、ほとんど笑うこともありませんでしたが、現在は、たくさん話し、笑い、遊び、クラスメートと走り回るなど、日常活動への参加意欲が顕著に高まっています。



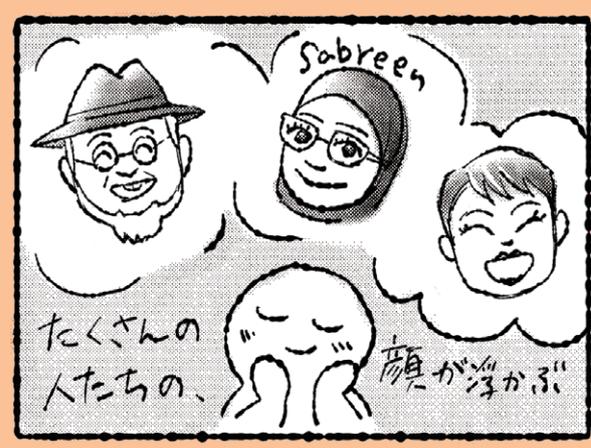
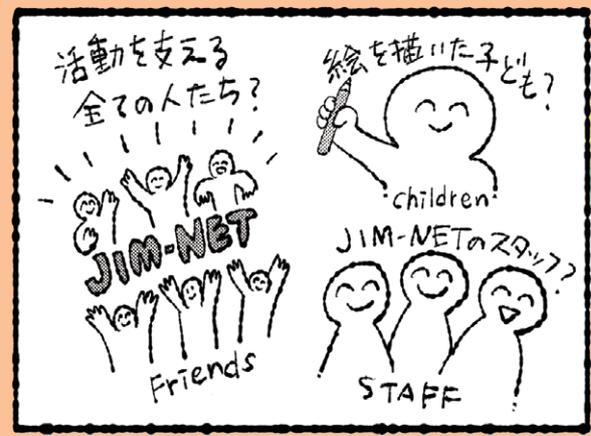
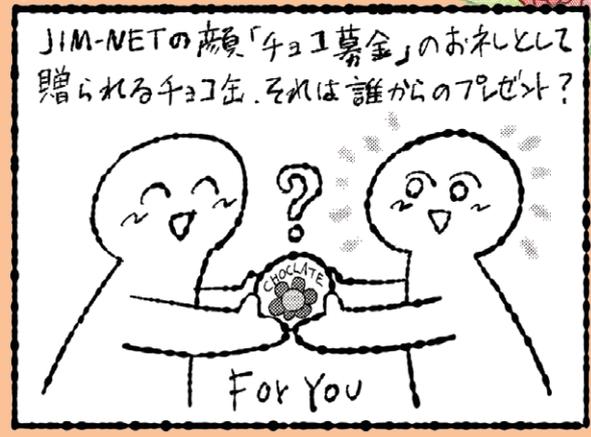
JIM-NET  
アート担当

# 野田先生の4コマ漫画

チョコ缶にかいてある



チョコ缶はプレゼント



子どもたちの絵がたくさんの人に届きます様に!!

野田 美波子(日本国際学園大学 講師): 2015年より学生とJIM-NETのイベント、デザインワークに参加している。



## 崔 麻里 (JIM-NET 代表理事)



10歳で卵巣がんを患い、バスラの病院に入院したサブリーンは、5年後に治療を終えることができました。闘病中に描いた絵には、マスクや点滴、看護師や医師の姿が多く見られました。ともに治療を続けていた友だちが突然天国へ旅立つ経験を何度も重ね、「死」を身近に感じたようです。イラクでは今でも、がんが感染すると信じられたり、がん患者のいる家は「呪われている」と見なされたりすることがあります。サブリーンだけでなく、両親や家族も、計り知れない辛さの中を生きてきました。

15歳で手術と化学療法を乗り越え、18歳からはがんサバイバーとして、JIM-NETのスタッフとして積極的にバスラ子ども病院に入院している子どもたちのケアにあたりました。子どもたち(5歳～14歳)への学習支援やお絵描き、

食事補助、心のケア等に丁寧に取り組む、子どもたちはもちろん、患者家族からも厚い信頼を得ていました。2022年、現地を訪問した駐在員に、サブリーンは優しい笑顔で「私はここにいる子どもたちの痛みと失望感が分かるので、いつも励ますようにしているんです」と話してくれました。

そんなサブリーンとは、東京事務所の私たちもチャットを通じて日々のやり取りを続けていました。現地の子どもたちの様子の確認に加え、都内や訪問先で見上げる空、神社仏閣、青々とした緑や鮮やかな花々、朝日や夕日、海の風景——。特別な言葉を添えなくても、ふと撮った一枚の写真を送ると、サブリーンはいつもまっすぐにその美しさを受け止め、彼女らしいコメントや画像への書き込みとともにすぐに返信をくれました。

昨年10月、サブリーンは突然体調不良を訴え、検査から手術へと一気に事態が進んでいきました。手術の数週間前には、都内で開催されたイベントでの

チョコ募金の様子に、「いつか日本で一緒にチョコ募金のイベントをやりたい!」とメッセージを送って来ていました。手術前日にも他愛ないやり取りを交わしましたが、手術後の大量出血により、とうとう帰らぬ人となりました。28歳の誕生日の数日後のことでした。

イラク現地スタッフたちは勿論、東京事務所スタッフ全員の喪失感言葉では表せないものでした。いつも静かな笑みとともに子どもたちのケアに当たったサブリーン。何かを伝えたくて撮った写真を喜んでくれたサブリーン。そんな彼女はこの世を去りましたが、いまでも私たちの心の中に存在しています。この場をお借りし、サブリーンが19歳の時に日本の支援者の皆さまに書いた手紙をご紹介します。

それまでの私は、普通の10歳の子どものような人生でした。しかし、それから一か月もしないうちに、私の人生は完全に変わってしまいました。私の体調は非常に悪くなり、痛みもひどくなりました。様々な検査を受け、癌という結果が出ました。そして手術を受け、手術は無事に成功しました。手術で私の身体から腫瘍を取り除きましたが、医師の考えと検査結果から化学療法を受けなくてはならなくなりました。

私は自分の運命、未来を知りませんでした。

癌とはどういう意味なのかさえも知りませんでした。癌は他の病気と一緒に薬を服用したり、注射をすれば治るものだと思っていました。

病院では毎日たくさんの子どもの患者が、私の目の前で亡くなりました。そしてこれは私に悪影響を及ぼしました。(このことは私の人生の中で、最もつらい出来事でした。)

化学療法は他の治療と違って、私の容姿と心を完全に変わらしました。痛みがあったり、時々食欲がなくなり、免疫が弱くなりました。そして私がもうすぐ死んでしまうのではないかと家族が恐れました。さらにつらいことは、人々が私を死が近づいている子どもであると、憐れみの眼で見ることでした。また彼らは、癌は伝染する病気と考えていたため、私に近づこうとはしませんでした。私は、彼らが私の髪の毛がないことを笑ったり、質問したりしたことを、今でも覚えています。

そして私は学校に行けなくなりました。しかしながらこれらすべてのことは、私を強くしました。自分は気にしていないし、強いということを見せようと思いました。そして徐々に強さと笑顔を見せるようになりました。

私は治療を終えましたが、癌が再発しました。2010年にすべての治療を終え、癌に打ち勝ちました。私は、私よりも強力な病気と闘って勝ったことを誇りに思います。私の体験談や、絵が多くの子供達にちょっとした笑顔を与えて、たくさん癌をやっつけてくれたらいいと思います。

私を優しく支えてくれた医師たち、家族、先生たちとJIM-NETに感謝しています。

サブリーン・アブドルザハラ  
(バスラ)



# Pray for Peace!



## ～イラク、シリア、そして世界の子どもたちとともに

会期： 2026年3月19日(木)～3月24日(火)

時間： 11時～18時30分

最終日(24日)は16時まで

会場： 神保町・文房堂ギャラリー

東京都千代田区神田神保町1-21-1 4F

1年に1度のギャラリー展を神保町・文房堂ギャラリーで開催して4年目となります。毎回、会期の日程をイラク戦争開戦の3月20日を挟むように調整しております。それは、イラク戦争後に急増したイラクの小児がんの子どもたちを支援するために発足したJIM-NETとして、「その日」を記憶することが大切だと考えているからです。

ウクライナ戦争、イスラエル・ガザ戦争は「未だに」終結の兆しが見えません。さらに新年早々、米国によるベネズエラ攻撃の報道が伝えられ、世界が、そして日本がいっそう混迷の渦に巻き込まれていくように感じるが増えています。一見、私たちは普通の暮らしをしているように見



えますが、いつ何が起ころか分からない危うい時代に生きているのかもしれない。

今回の企画展では、昨年11月に28歳のいのちを閉じたイラク・バスのスタッフ、サブリーンが遺した絵画と写真を追悼の意と祈りを込めて展示いたします。何よりも生きること、困った人を助けて人の役に立つこと、笑うことを大切に、そして平和な世の中を願っていたサブリーンとつながっていただければ幸いです。

♪ 3月20日(金) 14:00～ (要事前申し込み)

Pray for Peace! ☆シブピアノ演奏+トーク☆

登壇者：ウォン・ウィンツァン(ピアニスト)

♪ 3月21日(土) 14:00～

JUSTPEACE! ギャラリートーク

登壇者：川田淳(映像作家)

♪ 3月22日(日) 14:00～ (要事前申し込み)

JUSTPEACE! & Pray for Peace! スペシャルダイアログ

登壇者：サヘル・ローズ(表現者) × トロブチン・ニキタ(ウクライナ出身・茨城県留学生親善大使)

♪ 詳細は、HP または SNS でご確認ください♪

会期中は、子どもたちが描いた絵を活用した「マイノートブック」「ペーパーウエイト」を手作りするワークショップの開催も企画いたします。詳細は、随時JIM-NETのHPやSNSでご案内いたしますので、是非、ご参加ください!

### 退職の挨拶

### 斉藤亮平

2025年12月末日をもって退職しました元現地代表・斉藤です。

2017年の入職以降、海外事業担当としてイラクで

の支援業務に関わってきました。

この間、活動内容は小児がんの子どもたちとその家族を対象とした心理社会的支援の強化やシリア北東部への緊急支援など大きく変化し、団体としても過渡期にあったと感じています。イラクを取り巻く国際情勢や国内の政治的な決定により、計画通りに進まないことも多くありましたが、そうした状況の中で現地スタッフと共に、日々持ち込まれる課題について考え、話し合い続けてきた時間が強く印象に残っています。

小児がん支援の現場では、大変な治療を終えて学校に



戻っていく子どももいれば、治療の途中で突然命を落とす子、長い時間を病院で過ごさざるを得ない子もいました。支援の現場は、必ずしも「笑顔」や「希望」という言葉だけで語れるものではなく、むしろその前に立ちはだかる現実とどう向き合うかを問われ続ける場だったように思います。その現実を受け止めた上で、なお子どもたちが社会に戻っていけるよう関わることに、支援の意味があったのではないかと今は感じています。

今後も、多くのがんの子どもたちが一人でも多く学校や地域社会に戻れることを、心から願っています。また、日本においては支援者の皆様や協力団体の皆様に、報告会や各種イベントを通じてお話しする機会をいただき、大変お世話になりました。現地の活動を支えてくださったことに、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

郵便振替口座 00540-2-94945 加入者名 日本イラク医療ネット

Facebook、Twitter、Instagramもぜひご覧ください。『JIM-NETで検索』

募金・サポーター会費はこちらへ→

